



第6巻第7号
通巻第67号


ベリー・ホット あつい。 カモン 来れ、 アウト・オブ・ブルー 青天の霹靂

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番4号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

- 二面(建築面)
神秘の湖のほとりの自然公園計画進行中
- 三面からすライブラリー)
CD『アリーナ』
本『ダ・ヴィンチ・コード』
アート『エドワード・ホッパー』
- 四面(国際アート面)
ロンドンレポート
- 五面(語面)
ギリシャ語を読もう



例えば、空。例えば、雫。あるいは、汗。あるいは、アスファルトの照り返し。その上を流れる生暖かい風。その風を切り裂くように直線的にオオスカシバが行く。夏はエネルギーに満ち溢れた季節である。と同時に、私たちのエネルギーをじりじりと消耗させる季節でもある。野暮用で小一時間外出するだけでも大変だ。帰り途には、ペダルを踏む足も重く、息も絶え絶え、いつ倒れてもおかしくない、ああ、目の前が暗くなる……と、これは些か誇張が過ぎるけれど、気分としては近いものがなくもない。三十年ほど前には、午前中から日が暮れるまで、サッカーの練習で、こんな季節にさえ走り回っていたこともある。私の脳がねじくれてしまったのは、その当時、日光の直射を浴び過ぎたせいなのかもしれない。と、こんなばかんなことを思うのも、夏の暑さのせいだろうか、人こそ撃たねど。

日本には四季があり、おかげで、多様な自然に触れることができるわけだし、そのことが、豊かな感性を育む助けとなっていることは間違いない。そうなのだが、冬になれば、今、暑さへこたれているのと同様に、私は寒さに泣き言を重ねることである。毎年、同じことの繰り返し。その根性のなさが人間というもの

本質であるし、そのおかげで、衣類や冷暖房などというものを発明することができたのだ……無論、こんな見解は相当に無理矢理のものでしかないけれど、一握りの真実が含まれていないとも限らない。人々が暑さ寒さにもっともっと強かったなら、あるいは、忍耐力が今よりもはるかに強かったなら、左様な発明はなされなかったかもしれないではないか。周囲を見渡して見給え。如何に自然界が多様であろうとも、冷暖房に依存しているのは人間ばかりである。

寒暖に強く、乾湿にも強く、多少の排気ガスや光化学スモッグなど物ともしない。そんなタフな存在の代表と言えば、ゴキブリやネズミの類、それ以外には、雑草と呼ばれる植物群が挙げられよう。不思議なことに、人間に疎まれるものばかり。憎まれっ子世に憚るといふ物言いを御存知だろう。はてさて、実際のところ、嫌われるものほど逞しく生き抜くのか、逞しく生き抜くから嫌われるのか。

小鳥や鳩を愛する人の多くが、なじかは知らねどカラスは愛さない。蝶やクワガタを愛好する人の多くが、なじかは知らねどゴキブリは愛好しない。猫や犬やはたまたフェレットのような生き物たちを愛玩する人の多くが、なじかは

(最終面へ続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



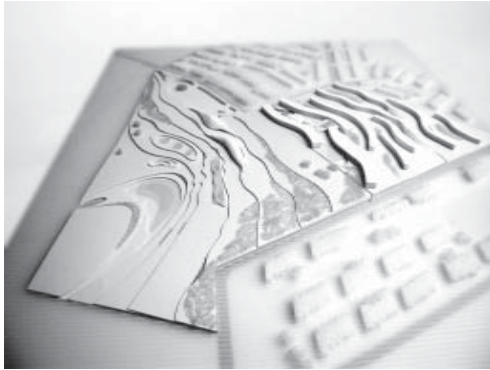
スペインの南の海岸に、不思議な色をしたふたつの湖がある。ひとつは深く静かな紺碧の湖で、もうひとつは、そのフ
ラミンゴのようなピンク色を時々刻々と変える神秘的な湖。
バクテリアと強い光の影響だという。

湖のほとりに、タランセラヒーの機能をもった自然公園をつ
くっている。気の長い計画になったが、3年経ってようやく
1棟目の建物が姿をあらわしてきた。設計をはじめたのは2
001年で、市の計画に対して、ずっと複雑で3倍もの規模
のリラクゼーション・パークを提案した。



ところが、それを実現させようと、皆が
努力してくれる。当初組まれていた予算
は何処かへ行って、変わりにもっと大き
なお金を探してきてくれた。市長も、現
地の建築家も、なんとかかよいものをつ
くるといって、純粋な気持ちがあるからこ
そ。

こんな、なんだかわからない、建築とモ
生き物ともつかないような「creature」に
対し、入札に手を上げたのは、地元の小
さな施工業者ひとつだけだった。難しい
建物は、いつでも彼らに押し付けられる
らしい。でも、実作を見たかぎりでは、あ
まり期待するのはやめようと感じた。



モックアップ(原寸大の部分的な施工実験)の惨憺たるでき。でもここからが
すこかった。やつは、スペインで一番良い鉄骨のファブリケーター(工場)を
探して来て、もっとも信頼できる木工業者を連れてきた。ヨーロッパでも随一
の金属板加工屋も控えている。良いものをすべて集めてくれた。

結果、毎日のように送られてくる写真は、ものをつくるときの高揚した感じ
を、みんなのこころの中に、ぶつぶつと醸造してくれることになった。

意図したイメージを現実の空間に結晶させること。多くの人たちが関わらなけ
ればならない。建築することのあいまいな部分がかたちをかえて混んとし
たわけのわからない力強さを発揮すると、いいモノができる。ようだ。束ねて
導く、空間のイメージの力。(篠崎健一)



Alina / Arvo Pöwrt

ECM、1999年、1591



目を閉じてこの静謐に身を委ねると、漆黒の闇に光の粒が降りそそぐイマジユが脳内を支配する。この光は、希望であり、悲しみであり、喜びであり、忘却であり、そして、痛みでさえある。闇の中を流れ落ちるものを追いつながら、私はいつか、あらゆる束縛から解放されて、身体一つで安らぎに包まれている自分に気づく。ありがとう、アルヴォ・ポウムラウト。

(全太)



The Da Vinci Code

Dan Brown

Doubleday、2003、ISBN 0-385-51322-4



ダ・ヴィンチ・コード(上・下)

ダン・ブラウン(越前敏弥訳)

角川書店、2004年、ISBN 4047914746(上巻)

物語はルーブル美術館長殺人事件で幕を開け、パリとロンドンを舞台にアメリカ人学者(ハーバード大教授)とフランス人警官(美人)が大活躍。ここ行きた!とか、この絵見てみたい!とか、そんな感じで楽しんだ人も多いのだろ。最近の新聞広告によると、アメリカで800万部、日本でもすでに50万部売れたというベストセラーである。(望月)

二人の間に生まれた子供は生き延びて、その子孫は秘密結社に守られて今もここに生きています。

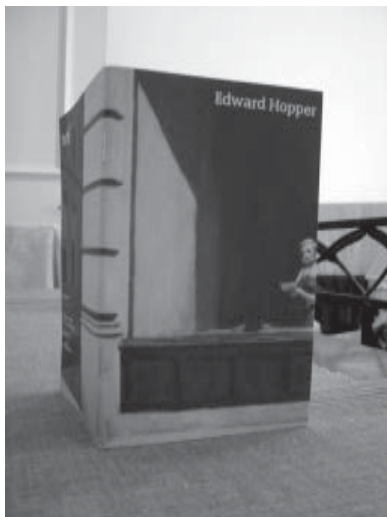
これらはモノにまつわる伝説だが、もっと派手なのがこの本が扱う「生身」の伝説である。曰く、イエス・キリストには妻がいた。その妻はレオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』に描かれている。



Edward Hopper

Tate Modern - until 5 September 2004

<http://www.tate.org.uk/modern/exhibitions/hopper/>



少し寂しい感じの、どこことなく静かなアメリカ的な絵を見たことはないだろうか? 僕はずっと前から知っていた気がするのだが名前も覚えてはいなく、最初にその絵を見たのはいつだったのかも覚えていない。先日BBCでホッパーのエキシビションに合わせて彼のドキュメンタリーのような番組を放送しているのを偶然見て、ああ、そんな名前だったのか!と、思わず感心してしまった。はっきりと好き嫌いが別れる画風。僕は何故だか引きつけられてしまう。光とシンプルに整理された構図。そんな絵の中にボツリと置かれたストーリー。冷たい感じがして好きではないという意見も聞くが、何となくその冷たさも理解できる。シンプルな構図の中に余りにも鮮明に光が捉えられているので、空気が存在しないような、凄く透き通っているような錯覚に陥る。冬には空気が透き通っていると言う理屈から、冷たく感じるのだろうか。彼のロジックで気難しそうな正確が伝わってくるのも興味深い。古き良きアメリカ。そんな物に引きつけられ、その透き通った空気に捕わってしまうのである。

(神山)

裏道

東京に比べると、ロンドンはずいぶん狭い街だ。そんな風に、来たばかりの頃は思っていた。いや、2年ぐらいはそんな風に感じていたかもしれない。別に面積を調べたりしてみた訳ではないので、断言はできないまでも、多分これは事実。地下鉄の駅で考えてみると話は早い。ロンドンの中心地の地下鉄の駅を二つ三つ歩いて移動することはそんなに難しい事ではない。実際、本当に中心地ならば殆ど歩いて回れてしまう。東京で考えてみると秋葉原、神田、御茶ノ水と歩くのだけでもかなり無理がある様な気がする。もちろん誰も池袋、新宿、上野を歩いて回ろうなんて考えたりしないだろう。大きな違いはやはり面積なのか。東京の主要な駅の周辺はそこだけで一つの街になっているような気がする。逆にロンドンでは、主要な駅のエリアはあくまでもロンドンという街の一地方な

のだ。そのぐらいいこの二つの街の認識に差があってもおかしくはない。そんな訳で、どうしても慣れないうちは決まった場所に行ってしまう事が多い所為か、何だかこの街は狭いなあ、と少し退屈に感じる事がしばしばあったような気がする。もしかしたら、他に目新しい事が多過ぎてそこまで余裕がなかったのかもしれない。まあ、始めはバスに乗るのにも一苦労していたぐらいいだから無理もない。他の事が目新しいすぎて退屈に感じるといっても変な話だが、きつと行く場所が限られてしまっていたのだろう。最近になってその余裕が出て来たのか、新しく発見することが多いような気がする。

先口、フラットメイトと、ハムステッドヒースと呼ばれる森に行つて来た。かなり有名なところなのだが何故か今まで行った事がなかったのだ。何があるのかといえは、単にだだっ広い草原と森があるだけなのだが、相当に広い。僕は元から方向音痴なので簡単に迷子になれそう

なぐらいいだ。その広い公園スペースでも言うのが、敷地内の所々に池があったりもする。釣りをしてる人もいれば、周りで日光浴をしている人やピクニックをしている人達などがいてそれぞれ。中でも、その池で泳いでいる人がいるのには驚いた。実はこのハムステッドヒースには泳げる池が三つほどあり、男用、女用、男女兼用と別れている。池はそれぞれ背の低いフェンスで囲まれていて、中央辺りに棧橋が見える。そのフェンスを辿ってそちら側へ回ると入り口があり、中に入ると脱衣所、シャワー、トイレと簡単な設備が有りその棧橋へと続いている。後は棧橋から池にジャボンと飛び込むだけなのである。水が汚いのが少し気なるが、もともとハイドパークの池で寒中水泳大会をやるぐらいなのだからこちらでは池で泳ぐというのは普通なのかもしれない。何よりもその雰囲気は独特で、いい感じだ。天気がいい時には是非とも試してみようと思った。

これは新しい発見のほんの一例にすぎないが、何だか一つわかった気がするのだ。ロンドンの良い所は何故かいつもひとつ裏に入った通りでみつけるような気がする。お店などが沢山ある所や大通りよりもひとつ裏、通りを一つ変えるだけで、嘘のように人がいなくなり雰囲気だけがらつと変わる。時には自分はこのな所にいたのかと改めて驚いたりもする。落ち着いたカフェやら、味のある本屋を見つたりできるのだ。街の中心よりもその二つ外、それぞれのエリア独特の色を楽しんだりするのも良いかもしれない。そんな風にして一歩引いた所で楽しむというのが、この街を楽しむ良いやり方だと思ふのだがどうだろうか？もしロンドンを訪れる機会があるならば是非とも試してみたい。大通りの裏を歩く。地下鉄に乗らずにバスで移動。気に入った所で降りて歩いてみる。そんなのが良いのかもしれない。僕は最近、自転車を買おうかどうかずっと悩んでいるところなのだ。

ロンドン つうしん
London Report



アテネ五輪記念

原点シミュレーションその二

日常の挨拶などコミュニケーションの原点とも言える表現を世界各国に学ぼうという連載。ギリシャ編の二回目である。(望月)

表記の仕方：ギリシャ語

右表を元に英字に変換(実際の発音)

アテネの町で偶然入ったレストランにはギター片手の流しがいた。ニヤニヤしている。颯爽と私の前に来て、にっこり。せっかくだ、やってもらおう。

曲はやっぱりラテンのノリだけど、ちょっと暗めのポルトガルのファドに近いかな。

Eukharisto(エフハリースト] はエフ]

「ありがとう」

演奏後、そう言って1000ドラクマ(ユーロ導入前の当時、1ドラクマはほぼ1円)渡したが、なんかかなり不満そうな様子。無視したが、腹いっぱい食っての飯代は750ドラクマ。それが割高な観光客料金だったとして、上げ過ぎだったか失礼だったか、良く分からない。

ギリシャ映画界の超巨匠テオ・アングロプロスの『アレクサンダー大王』は、大王一味が英国貴族たちを誘拐する場面から始まる。その現場は丘に建つ神殿だったと記憶しているが、たぶんスニオン岬のポセイドン神殿にまちがいない。アテネ中心部から2時間ほどバスに揺られたところにあるのだが、バスの中には、

s /

Iapona(ヤポナス)/ Iaponeza(ヤポネザ)

「日本人の男/女」

ぱっかり8人も。

翌日アテネの外港ピレウスから船でクレタ島に向かう。目指すは四千年前の遺構クノッソスの遺跡だ。

「ヨーロッパ」の語源はこの島にまつわる。ギリシャ神話によると、「フェニキアの王女エウローペーを愛した神々の王ゼウスは、白い牡牛に身を変えて彼女を連れ去った。たどり着いたクレタ島で彼女は三人の子を生んだ。その一人ミノスは後にクレタの王となった」。

クレタの文明は王の名にちなんでミノア文明と呼ばれ、ギリシア人たちに多大の影響を与えた。ゆえにギリシア人たちは、ミノス王の母エウローペーに敬意を表し、自分たちの住む大陸を彼女の名で呼ぶようになったという。

さて、腹は減ったが、そろそろオリーブオイルは勘弁して欲しい。で、世界中ないことはない中華料理屋を探す。と、見つかったのは朝鮮人家族の営む中華料理屋。その名も「大多路樹」。良く分かんないけど仏教ここにありって感じ。焼きそばと春巻きを注文したが、こういうときは何を食っても美味しい。帰り際、なかなか

現代ギリシャ文字英文字発音対応表

以下、私が発音本位でかなり雑に簡略化した希英対応表である。これでオリンピック記念ギリシャ関連番組を見ていて目に入ったギリシャ文字も読めるはず。

これらはいくまでも現代ギリシャ語の発音である。プラトンとかアリストテレスとかの頃の読み方とはけっこう違うところもあるのでご注意ください。

ギリシャ語	英語
アルファ	A
ベータ	V
ガンマ	G / I
デルタ	D
エプシロン	E
ゼータ	Z
イータ	I
シータ	th
イオタ	I
カッパ	K
ラムダ	L
ミュー	μ M
ニュー	N
クサイ	k(クス)
オミクロン	O
パイ	P
ロー	R
シグマ	S / Z
タウ	T
ユブシロン	U / Y
ファイ	F, ph
カイ	H / kh, ch(ク)
プサイ	p(プス)
オメガ	Ω
二重母音	
	は「エフ」あるいは「エヴ」



か美人の看板娘が、

Antic(アディオ] は語中で並ぶと d の発音になる]
「さよなら」

えっ？アディオス？スパニッシュ？へえ、ギリシャ語なんだ。やっばラテン系なのね。



(最終面に続く)

(五面から続く)

クレタからロードスへ。中東にも近いトルコ対岸のこの島には、古代、現代に加え、城や砦など中世の痕跡が色濃く残る。それぞれがコンパクトにまとまっていて、とても楽しい観光スポットなのはいいのだが、それにしても地中海系の人たちの時間のルーズさは何とかならないものか。

昨夜、午後6時に飛ぶはずの飛行機が離陸したのは10時。もしかして謝ったりするのかと思って「すみません」を調べてみると、

μ

Suignomi (スイグノミ) [は i と g の二通りの読みがある] 「ごめんなさい」

たぶん私のリスニング力のせいではなく、きっと誰も言ってなかった。いつかここに書いたけれど、スペインで列車が4時間遅れたときもそうだった。交通機関の遅れとか、そんなちまちましたことで彼らは謝ったり腹を立てたりしないのである。

ampm marusho
あいロード商店街 新井薬師前駅→

Kanna
bar&kitchen

早稲田通り
中野通り
中野ブロードウェイ
中野駅↓

営業時間
平日・土曜日 11:30~15:00 / 17:30~25:00
日曜日 17:30~25:00
定休日 毎週火曜日 & 毎月第3日曜日

中野区新井1-30-6
第1三番ビル1F
Tel: 03-5343-1316

bar&kitchen kanna

知らねどネズミは愛玩しない。同じような傾向が、植物を育てる人たちにもあるようだ。同じ植物でありながら、雑草と呼ばれるものたちは目の敵にされ、花壇や植木鉢の中から、文字通り根絶されるべく、激しい攻撃を受けるのである。

(一面から続く)

カラスはカラスであるし、ネズミはネズミ、ゴキブリはゴキブリである。当たり前だ。しかし、雑草とは何なのかとなると、これが、なかなか一筋の縄では括れぬもののようにある。人によって解釈はまちまち。辞書に当たっても要領を得ない。そうは言っても、いざ現場に立てば、これは雑草なのか否か、私の如き下々の一兵卒が判断に迷って手を止めて考えるわけにはゆかぬ。指揮官の指示に従うに如くはない。草を刈りしながら、よくわからぬものに出会す度に「上官殿、また、未知の植物であります」と報告。「それね、それは白い花が意外にきれいに咲くけどね、この際だから抜いちゃおうよ」

「あ、それぞれ、それって実はミョウガなんだよー。でも、半分ぐらい抜いちゃっていいんじゃない」などと、ありがたき御指導を仰ぐ私である。汗に塗れ、蚊に血液を提供し、土埃を被りながら、一時間ほど経過しただろうか。雑草と認定された物どもは引き抜かれ、非雑草(そんな呼び方があるとして)ばかりが残る、小さくまとまった小さな庭が、ますます小さくそこに在る。この恣意的な完成形は何かに似ていると思う。その何かが何なのか、どうしても思い出せないのだけれど。

植物の側に立って眺めてみると、この出来事はなかなか恐ろしいものだ。佐藤家の小庭という、自然の成した、極々限られたささやかな宇宙に、人間という魔物たちがやってきて、こいつらは根っこ倒してしまえたの、この連中は半分だけは生かしてあとは殺してしまえたの、と。同じミョウガでも、ぼくは助かったけれど、妹は…… などという、神をも畏れぬ選別が行われ。

同じ雑草でも、垣根や花壇の外側にいるものは生き残り、未来への希望を胸にして子孫繁栄を目指す。もつとも、今日を生き延びたところで、この団地では年に何度も業者を雇って草刈りが行われる。一ストローク単気筒と思われる、バリバリ爆音を発するマシンで、一網打尽に……。

庶民の庭いじりというちっぽけな快楽でさえ、何かを犠牲にせずには成り立たないのか。だとすると、アメリカのような野望に満ちた国家の快楽のためには、どれほど多くの犠牲が必要なのか、と。

こんなことを考え始めると限りがなく、陰々滅々と気が鬱ぎ、外気とは裏腹に、心の中はすっかり冷え込んでしまつばかりである。ああ、寒い、寒い。全く寒い夏である(全太)。



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice: +81-3-3220-0644
Facsimile: +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第六巻第七号(通巻第六七号)、無事、発行できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発行予定日は二〇〇四年八月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

371

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

宝仙寺
中野坂上駅